

## 2. 災害事例

### (1) 災害事例①

次の災害事例はいずれも医師の診察、治療を受けた後、翌日には出社するなどして、休業災害にはならなかった例です。

#### 【災害事例－1】

発生日時			8月	温度	30℃	湿度	69%
工事	トンネル工事	職種	鳶工	性別	男	年齢	40代
災害概要	南坑口法面で単管足場を組立てていた被災者は、15:50ごろ左足に痺れを感じたため、足場を降り、熱中症対策室(現場詰所)にて応急処置(休憩、水分塩分補給、冷却)を取った。一旦痺れは治まったが、17:00頃痺れが再び起こったので乗用車で病院に搬送した。						
	搬送する途中、痺れがひどくなり座っていられなくなったので、事務所に戻り、応急処置(休憩、水分塩分補給、冷却)をし、17:30救急車を要請し、病院へ搬送した。病院で血液検査と点滴治療を受け、入院等の必要なしとの診断を受けたので、19:30頃宿舎へ戻った。						
	なお、被災者は十分な水分と適量の塩分を定期的に摂取していなかった。						
	また、法面に設置された足場上での作業のため、直射日光での作業を強いられる比率が高い状況にあった。						
	事業者は、朝礼時に労働者の健康状態の確認を行ってはいたが、その他の時間には確認は行っていなかった。						

#### 【災害事例－2】

発生日時			7月	温度	33℃	湿度	60%
工事	球場建設工事	職種	型枠大工	性別	男	年齢	20代
災害概要	被災者は、朝から型枠解体工事に従事していた。11:00まで1時間毎休憩を取っていたが、それまでは特に体の不調はなかった。昼休憩前に気分が悪くなり、休憩所で昼食を取らずスポーツドリンク1本飲んで、休んでいた。						
	13:00になり、一斉清掃の時間になったが、気分がすぐれないのも治ったので、一斉清掃に引き続き、作業に従事した。14:00頃再度気分が悪くなったので、職長にその旨告げて休憩所に戻りスポーツドリンクを1本飲んで再度作業に戻ったが、職長から休憩所へ戻って休憩するよう指示されて、休憩所で休んでいた。15:00の休憩時間になり、職長が被災者の症状を見たが、快方する様子がないので、15:30元請職員と共に病院へ行き、点滴治療を受け病状が回復したので、17:00頃現場に戻ってきた。						
	なお、被災者は十分な水分と適量の塩分を定期的に摂取していなかった。						
	また、休憩を取らず長時間継続して作業が行われていた。						



### 【災害事例－3】

発生日時		7月	温度	29℃	湿度	65%	
工事	野球場建設工事	職種	土工	性別	男	年齢	10代
災害概要	被災者は8:30頃から、スタンドの段床コンクリート打設の相判作業を行っていた。10:00頃型枠工が異変に気づき確認したところ、軽い痙攣を起していたので、休憩するよう指示をした。						
	しかし、歩行困難のため職員が手を貸して休憩室まで連れていった。熱中症と思われたので10:15頃、ただちに救急車を要請し病院に搬送し点滴治療を行った。						
	その後、症状が回復したので、現場へ戻ってきた。						
	なお、コンクリート打設の通例及び連日の炎天下での作業により、各労働者の体力が低下していたが、適切な休憩が取られていなかった。						

### 【災害事例－4】

発生日時		7月	温度	30℃	湿度	61%	
工事	老人ホーム建設工事	職種	土工	性別	男	年齢	30代
災害概要	1Fピット内清掃作業を2名で行っていたが、14:00頃被災者が熱っぽさと体のだるさ及び寒気を職長に伝え、作業を中止するよう指示されたので、休憩所にて休憩していた。						
	16:00頃一向に状況が快復しないので、職長から元請職員に報告があり、その後直ぐ病院へ行き診察を受けた。熱中症と思われるため点滴を受けた結果快復したが、大事をとり自宅まで送り届けた。						
	本人の顔色は良く昼には昼食もしっかり取っていたため、一斉清掃の後であり疲労の為ダウンしたのだろうと職長も本人も勘違いしていた。						

### 【災害事例－5】

発生日時			8月	温度	31℃	湿度	59%
工事	防波堤建設工事	職種	職長	性別	男	年齢	30代
災害概要	12:00頃、上部工補修用ブラケット足場組立作業を終え、昼食のため車に乗り事務所まで帰ったが、気分が悪くなり車から降りられなくなった。直ちに、車で病院まで搬送し、治療をうけ、15:30頃に寄宿舍へ帰宅した。翌日の再発防止教育には出席した。						
	ケーソン横での作業であり、風通しの悪い場所での作業であった。休憩所に日よけを設置し、クーラーボックス(氷入り)、スポーツドリンク、梅干を現場に備えていたが体を冷やす設備が無かった。外気温、湿度共に高く、無風状態であった。						
	なお、健康管理チェックシートを使用しての健康管理を行っていたが、作業中の管理が十分でなかった。高温時に休憩が取れておらず連続作業時間が長時間となっていた。						

### 【災害事例－6】

発生日時			8月	温度	33℃	湿度	51%
工事	集合住宅建設工事	職種	圧接工	性別	男	年齢	50代
災害概要	被災者は建設中の集合住宅の1階梁の圧接作業をしていた。昼休みに食事を取ろうとしたが食欲がなく、気分が悪いため休憩所で休んでいた。体調不良に気付いた職長が、13:10頃職長の車で病院へ診察を受けに向かった。13:30頃から1本目の点滴を実施し、15:30頃現場に帰着した。						
	なお、被災者は前日まで夏期休暇を取っており、暑熱環境に順化していなかった。						

### 【災害事例－7】

発生日時		8月	温度	34℃	湿度	51%	
工事	橋脚下部建設工事	職種	鳶工	性別	男	年齢	60代
災害概要	午前中、鋼管矢板基礎工の定規工である導杭の引抜作業を終了し、午後から鋼材を積んだ台船を資材ヤード岸壁に曳航、陸揚げ作業を行った。これに伴い被災者は資材ヤードにおいて玉掛作業を行っていた。						
	15:40頃、気分が悪くなり、仲間に伝えて日陰で休憩を取り水分補給と氷で体を冷やしたが15:50軽い痙攣がみられた為、16:00に救急車を呼び、病院に搬送した。16:25に病院に到着し治療を受けた結果、21:00体調が回復し、医師の診断により帰宅するよう指示を受け、他作業員と共に宿舎に帰宅した。						
	気温が上昇している中での作業であった。						





## （２）災害事例②

次の事例は、熱中症で死亡に至った例です。

### 【災害事例－８】

発生日時		7月	業種	その他の事業(測量業)			
温度	32℃	職種	測量補助	性別	男	年齢	40代
災害概要	<p>被災者は、肥満気味で、又、統合失調症で約3ヶ月半休業していた。職場復帰の初日、被災者は上記疾病から、体温調整中枢を抑制する薬を服用して午前中に同僚1名とともに山中の林道建設予定地の測量のため、水分及び塩分を補給しながら、仮杭打ち込み作業をした。昼頃、一時的に雨天となったが、午後から同作業を再開したところ、午後2時30分頃「疲れ」を感じ、作業を中止したものの回復せず熱中症で死亡した。</p> <p>なお、事業場は、被災者に対する健康診断を実施していなかった。</p>						

### 【災害事例－９】

発生日時		7月	業種	商業			
温度	35℃	職種	新聞配達員	性別	男	年齢	50代
災害概要	<p>被災者は、肥満気味で、又、糖尿病の持病もあった。さらに、被災者は、被災の2日前に体調不良で早退し、翌日も体調不良で事業場を休んだ。</p> <p>発生日当日、体調不良のまま出勤し、午後2時頃から夕刊配達を開始し、熱中症で死亡した。</p> <p>なお、事業場は、被災者に対する健康診断を実施していなかった。</p>						

## 添付資料

1. 関係法令
2. 関係指針
3. 平成 21 年 6 月 19 日付け基発第 0619001 号「熱中症の予防について」
4. 平成 17 年基発第 0729001 号  
「熱中症の予防における WBGT の活用について」